

T団地在住の高齢者と地域住民によるインフォーマル・サービスに関する調査 －「助っ人隊」の事例を中心に－

今屋 香澄¹・平山 愛美¹・前田 優美¹・本松 邦恵¹・平野 裕子²

要 旨

目的:「助っ人隊」の認知・利用・今後の利用の現状と、それに関連する社会・経済的要因を明らかにする。
方法:T団地の60歳以上の住民271名を対象とした。調査項目は、基本属性、生活上の不安、ソーシャル・キャピタル、ソーシャル・サポートの有無、「助っ人隊」の認知・利用・今後の利用、モラル・スケール等である。
結果:「助っ人隊」の認知では同居家族がいる人、ソーシャル・サポートがある人、利用の有無では高齢、女性、無職である人で有意な差がみられた。ソーシャル・キャピタルは「助っ人隊」の認知、利用の有無、今後の利用の有無において関連がみられたが、モラル・スケール合計との間で有意差はなかった。
考察:「助っ人隊」はソーシャル・キャピタルが豊かな人ほど認知・利用されている反面、人間関係に不安がある人にも利用されている。このことから、「助っ人隊」はT団地のソーシャル・キャピタルの中で排除されかけている人達に働きかけることで、比較的中立なインフォーマル・サービスの役割を果たす機能があると考えられる。

保健学研究 25(1): 29-40, 2013

Key Words : インフォーマル・サービス, ソーシャル・キャピタル, ソーシャル・サポート, 高齢者, 地域

(2012年11月30日受付)
(2013年1月8日受理)

I. 諸言

現代社会は近所付き合いが希薄になってきており、地域の助け合いが急速に失われていることが指摘されている。例えば、NHK放送文化研究所¹⁾の「日本人の意識調査」では、近隣の人間関係について「何かにつけ相談したり、助け合えるような付き合い」を望む人々の割合は、1973年から2003年にかけて34.5%から19.2%に減少し、それに代わって、「会った時に挨拶する程度の付き合い」が15.1%から25.2%に増加しているという報告がある。また、高齢化社会が進むことで独居高齢者の増加や、孤独死が社会問題ともなっている²⁾。

そこで希薄化が進む地域問題を解決する上で重要なのが、近年注目されている「ソーシャル・キャピタル」である。Putnam³⁾によるとソーシャル・キャピタルは「調整された諸活動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴」と定義している。Putnam以前にもソーシャル・キャピタルに関する研究は存在しており、その一人であるColeman⁴⁾によると、ソーシャル・キャピタルは「単一の構成要素(entity)からなるのではなく、共通して二つの特徴をもつ多様な構成要素からなる。すなわち、それらの要素はすべての社会組織のある側面から形成され、そしてその組織の中にいる個人の特

定の行動を促進する、という特徴をもつ」と定義しており、Putnamの定義はColemanの理論を基本的に受け継ぎ発展させたものである。ソーシャル・キャピタルの利点は、家族と若者の問題行動、学校と教育、コミュニティ生活、仕事と組織、民主主義と統治、経済的發展、犯罪学、公衆衛生の少なくとも8つの分野の調査で検出されてきた⁵⁾。

加えてColeman⁴⁾は「自発的な協力がとられやすいのは、互酬性の規範や市民的積極参加といった形態での社会資本を、相当に蓄積してきた共同体である」とも述べているように、ソーシャル・キャピタルを豊かにすることで、地域住民による地域住民のための協力が促進されると考えられる。

近所付き合いの希薄化と高齢化の問題を受け、各地で自治会などを中心に高齢者の見守り活動等のインフォーマル・サービスが増加してきている^{6,7)}。しかし、活動報告は数多くされているが、インフォーマル・サービスを利用している人たちの特徴や活動に対しての意見などについて学術的検討を行った先行研究は少ない。そこで本研究は、高齢者の「ちょっと困った」を解決しようと活動している、T団地の住民の有志によって結成された組織である「助っ人隊」というインフォーマル・サービスに注目した。「助っ人隊」の活動は県内のマスコミで

1 長崎大学医学部保健学科看護学専攻

2 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科

も取り上げられており、自分たちの住む地域の問題を可能な限り自分たちで解決しようと活動している⁸⁻¹⁰⁾。

本研究の目的は、「助っ人隊」の認知・現在の利用・今後の利用の現状を明らかにし、それに関連する社会的・経済的要因を明らかにすることである。

II. 用語の定義

1. 「助っ人隊」：平成21年4月、高齢者の生活支援を目的に、長崎市T団地自治会有志が発足させたインフォーマル・サービス。高齢者を対象に、高所での作業や、重い物の移動などの生活支援に取り組んでいる。なお、「助っ人隊」の活動対象は自治会未加入者の場合もあり得ることから、自治会からは独立した別組織として助成金等の交付は受けていない。

2. ソーシャル・サポート：ソーシャル・ネットワーク、社会的人間関係の中でもたらされる援助。情緒・情報・手段的サポートの分野に分けられる。

3. インフォーマル・サービス：国や地方公共団体など公的機関が行う、法律などの制度に基づいた支援であるフォーマル・サービスに対し、家族や友人・個人・ボランティア集団・近隣住民などによる支援。

4. ソーシャル・キャピタル：調整された諸活動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴。

5. 生活満足度：改訂PGCモラル・スケール¹¹⁾を用いて高齢者の幸福感・心理的安定・孤独感・老いに対する態度を測定したもの。

III. 研究方法

1. 調査対象

本研究の対象となる地区は、長崎市郊外に位置するT団地である。2012年8月末日現在の人口は1116名、世帯数413戸であり、高齢化率は33.5%となっている。長崎市T団地の自治会長から紹介を受けた、自治会加入者であり60歳以上の高齢者である271名を対象とした。

2. 調査方法

データの収集は、T団地の自治会を通し、自治会に加入している60歳以上の各個人に自記式無記名調査票を配布した。回収は自治会を経由せず、調査票を同封した返信用封筒にて郵送法で回収した。回答済み調査票の返答により、調査への参加同意が得られたとみなした。調査期間は2012年10月17日から10月31日までの約2週間であった。

3. 調査項目

調査項目は、年齢、性別、家族形態、現在の仕事の有

無、居住年数、訪問看護・介護を利用しているか、生活上の不安、ソーシャル・キャピタル、ソーシャル・サポートの有無、「助っ人隊」の認知・現在の利用・今後の利用・利用しなかった理由、改訂PGCモラル・スケールである。

1) 生活上の不安：「健康状態」「自身の世話や介護」「家族の世話や介護」「家庭内の人間関係」「近隣との人間関係」「近隣の住環境・生活環境」「地域の非行犯罪」「社会上の孤立」「経済状況」の9項目を各設問5段階（かなり不安である=1、少し不安である=2、どちらともいえない=3、あまり不安でない=4、全く不安でない=5）で評価する。各設問得点を合計し、合計得点（以下「安心総合得点」）が高いほど生活上の不安が低く、安心総合得点が低いほど生活上の不安が高い。

2) ソーシャル・キャピタル：内閣府調査¹²⁾を参考にした。「現在の近所との付き合い方（互いに相談したり日用品の貸し借りをするなど、生活面で協力しあっている人がいる=4、日常的に立ち話をする程度の付き合いはしている=3、あいさつ程度の最小限の付き合いしかしていない=2、付き合いは全くしていない=1）」「今後の近所との付き合い方（互いに相談したり日用品の貸し借りをするなど、生活面で協力しあいたい=4、日常的に立ち話をする程度の付き合いをしたい=3、あいさつ程度の最小限の付き合いでよい=2、付き合いは全くしなくてよい=1）」「現在の近所との付き合い頻度」「今後の近所との付き合い頻度」（～週に数回=5、～月に数回=4、～年に数回=3、～数年に1回=2、全くない=1）」「近所への信頼度」（信頼できる=5、どちらかといえば信頼できる=4、どちらともいえない=3、どちらかといえば信頼できない=2、信頼できない=1）」「現在の自治会活動参加（毎回参加する=4、時々参加する=3、あまり参加しない=2、全く参加しない=1）」「今後の自治会活動参加」（毎回参加したい=4、時々参加したい=3、あまり参加したくない=2、全く参加したくない=1）

3) ソーシャル・サポートの有無：「食料品や日用品の買い出し」「近所付き合いでの悩みごと相談」「介護保険についての相談」この3項目に対して誰か頼れる人がいるかについて尋ね、いる場合は「主に誰に頼っているか」を同居家族、同居していない家族、親戚、友人、近隣の人、「助っ人隊」、ヘルパー、行政機関、民生委員、宅配食事サービス、その他の選択項目から1つだけ選択してもらう形をとった。

4) 「助っ人隊」について：「『助っ人隊』の認知」「『助っ人隊』の現在の利用の有無」を尋ね、利用したことがある人には「利用内容」を、利用したことがない人には「利用しなかった理由」の設問項目をそれぞれに設けた。また、「今後『助っ人隊』を利用したいか」を尋ねた。「助っ人隊」に対する希望や意見について自由回答欄を設けた。

5) 改訂PGCモラル・スケール：高齢者の主観的幸福感に関する既存の測定尺度の分析に基づいて開発された、改訂PGCモラル・スケールを使用した。高齢者の幸福感、心理的安定、孤独感、老いに対する態度の測定を目的として作成した17の質問項目からなり、各質問項目に対し積極的な回答をした場合に1点が与えられ、満点は17点となる。各設問得点を合計（以下モラル合計得点）し、モラル合計得点が高いほど主観的幸福感が高く、モラル合計得点が高いほど主観的幸福感が低いとする。

また、調査票末尾には調査に関する自由回答欄を設けた。

4. 分析方法

分析は主として χ^2 検定、t検定等を用いた。分析にはJMP ver.10を用い、有意水準は5%未満を有意差ありとした。

5. 倫理的配慮

本研究は長崎大学大学院医歯薬学総合研究科倫理審査委員会における承認を得た上で実施した。（承認番号：120823045）

IV. 結果

調査票は158人（回収率58.3%）から回収され、そのうち白紙回答の2人を除く156人（有効回答率57.6%）を分析の対象とした。調査対象者の基本属性は表1の通りである。対象者の男女比は男性55.5%、女性44.5%と男性の方が多かった。平均年齢は68（SD6.4）歳であり、男性と女性の年齢には有意な差がみられなかった。職業の有無については、無職者71.4%であり、有職者の平均年齢は63.6歳、無職者の平均年齢は69.8歳と有意差があった（ $p<0.01$ ）。家族形態は、独居が16.6%、その他（夫婦家族、核家族、3世代家族等）が83.5%であった。居住年数は平均21（SD6.7）年であり、20～24年が34.6%と最も多かった。訪問看護・介護を利用しているかに関しては、利用している人が3.3%、利用していない人が96.7%であった。

表1. 基本属性% (n)

属性	分布
性別	
男性	55.5 (86)
女性	44.5 (69)
年齢	
平均	68 (SD6.4)
60-64	42.4 (64)
65-69	19.9 (30)
70-74	22.5 (34)
75-79	6.6 (10)
80-	8.6 (13)
職業の有無	
有	28.6 (44)
無	71.4 (110)
家族形態	
独居	16.6 (25)
夫婦	44.4 (67)
その他	39.1 (59)
居住年数	
平均	21.1 (SD6.7)
-10	7.8 (12)
11-14	8.5 (13)
15-19	15.0 (23)
20-24	34.6 (53)
25-30	29.4 (45)
30-	4.6 (7)

生活上の不安については表2の通りである。健康状態、自身の世話や介護、家族の世話や介護、経済状況では「少し不安である」と「あまり不安ではない」で二峰性を示していた。一方、家庭内の人間関係、近隣との人間関係、地域の非行犯罪、社会上の孤立では「あまり不安ではない」「全く不安でない」と答えた人が多かった。安心総合得点の平均は31.4（SD7.1）点であった。

ソーシャル・キャピタルについては図1-1～1-4に示す。現在の近所との付き合い方では「日常的に立ち話をする程度の付き合いはしている」が51.0%で最も多く、今後の近所との付き合い方では「日常的に立ち話をする程度の付き合いをしたい」が57.5%と最も多かった。現

表2. 生活上の不安 % (n)

	n = 155				
	かなり不安である	少し不安である	どちらともいえない	あまり不安ではない	全く不安でない
健康状態	9.0 (14)	42.6 (66)	7.7 (12)	30.3 (47)	10.3 (16)
老後の自身の世話や介護	12.3 (19)	24.5 (38)	11.6 (18)	31.6 (49)	20.0 (31)
家族の世話や介護	13.5 (21)	27.1 (42)	11.0 (17)	29.7 (46)	18.7 (29)
家庭内の人間関係	2.0 (3)	13.1 (20)	9.2 (14)	31.4 (48)	44.4 (68)
近隣との人間関係	2.0 (3)	6.5 (10)	15.7 (24)	39.9 (61)	35.9 (55)
近隣の住環境・生活環境	5.2 (8)	24.2 (37)	14.4 (22)	31.4 (48)	24.8 (38)
地域の非行犯罪	2.6 (4)	13.7 (21)	17.6 (27)	45.1 (69)	20.9 (32)
社会上の孤立	1.3 (2)	15.7 (24)	16.3 (25)	41.2 (63)	25.5 (39)
経済状況	9.1 (14)	27.9 (43)	11.7 (18)	38.3 (59)	13.0 (20)
安心総合得点	平均 31.4 (SD7.1) 点				

在の近所との付き合い頻度、今後の近所との付き合い頻度は「～月に数回」が最も多く、それぞれ39.7%、41.5%であった。近所への信頼度は「どちらともいえない」が41.7%で最も多く、次いで「どちらかといえば信頼できる」「信頼できる」と答えた人が多く、それぞれ37.1%、19.2%であった。現在の自治会活動参加は「毎回参加する」が40.3%で最も多かったが、今後の自治会活動参加は「時々参加したい」が46.0%で最も多かった。

ソーシャル・サポートについては図2-1～2-3に示す。各項目で主に頼る相手として「同居家族」が最も多く、「食料品や日用品の買い出し」が77.5%、「近所付き合いでの悩みごと相談」が60.2%、「介護保険についての相談」54.5%であった。同居家族以外に頼る相手として、食料品や日用品の買い出しを主に頼む相手では「同居していない家族（10.8%）」「友人（4.9%）」「近隣の人（3.9%）」の順に多かった。近所付き合いでの悩みごとを主に相談をする相手では、「近隣の人（13.3%）」「友人（10.2%）」「同居していない家族（8.2%）」の順に多く、「その他（自治会長、自治会）（3.1%）」との回答があった。介護保険について主に相談をする相手では、「友人（11.4%）」「同居していない家族（9.1%）」「その他（6.8%）」の順に多く、その他では「知人のケアマネジャー」「税理士」「医師」と、専門職者の回答があった。「助っ人隊」の利用については、近所付き合いでの悩み相談が3件、介護保険の相談が1件であった。

「助っ人隊」の認知については「知っている」が86.3%であった。「利用したことがある」は11.0%で、利用内容では「庭木の剪定、草刈り（7件）」「電球の交換（4件）」「朝市（3件）」「テレビやトイレの修理（2件）」「家具の移動（2件）」「網戸や障子の張り替え（2件）」「各種相談（2件）」「害虫駆除（2件）」の順に多かった。今後「助っ人隊」を利用したいと回答した人は63.8%であった。現在「助っ人隊」を利用していない人は89.0%で、そのうち「自分で出来るから」と答えた人が最も多く、「助っ人隊」を利用していない人のうちの87.2%であった。

モラル合計得点の平均値は11.3（SD4.0）点で、最高点は17点、最低点は1点であった。

各独立変数と「助っ人隊」の認知・現在の利用・今後の利用との関係は表3の通りである。「助っ人隊」の認知では、家族形態（ $p<0.01$ ）、今後の近所との付き合い方（ $p<0.05$ ）、現在の近所との付き合い頻度（ $p<0.05$ ）、今後の近所との付き合い頻度（ $p<0.01$ ）、近所への信頼度（ $p<0.01$ ）、現在の自治会活動参加（ $p<0.01$ ）、食料品や日用品の買い出し（ $p<0.01$ ）、近所付き合いでの悩みごとの相談（ $p<0.01$ ）、介護保険の相談（ $p<0.05$ ）との間で有意差があった。「助っ人隊」の利用の有無では、年齢（ $p<0.001$ ）、性別（ $p<0.01$ ）、現在の仕事の有無（ $p<0.001$ ）、近隣との人間関係（ $p<0.05$ ）、現在の近所との付き合い方（ $p<0.01$ ）、今後の近所との付き合い方（ $p<0.01$ ）、現在の近所との付き合い頻度（ $p<0.01$ ）、近所への信頼度

（ $p<0.01$ ）との間で有意差があった。今後「助っ人隊」を利用したいかでは、現在の近所との付き合い方（ $p<0.05$ ）、今後の近所との付き合い方（ $p<0.01$ ）、現在の近所との付き合い頻度（ $p<0.05$ ）、今後の近所との付き合い頻度（ $p<0.001$ ）、近所への信頼度（ $p<0.001$ ）、今後の自治会活動参加（ $p<0.01$ ）との間で有意差があった。「助っ人隊」の認知・現在の利用・今後の利用とモラル・スケール合計との間で有意差はなかった。

「助っ人隊」を利用しなかった理由とその属性との関係については表4の通りである。「自分達で出来るから」と回答した人では、訪問看護・介護を利用しているか（ $p<0.05$ ）、自身の世話や介護（ $p<0.05$ ）、家庭内の人間関係（ $p<0.001$ ）、近隣との人間関係（ $p<0.001$ ）、近隣の住環境・生活環境（ $p<0.01$ ）、社会上の孤立（ $p<0.05$ ）、経済状況（ $p<0.05$ ）、安心総合得点（ $p<0.01$ ）、現在の近所との付き合い方（ $p<0.05$ ）、近所への信頼度（ $p<0.05$ ）、近所付き合いでの悩みごとの相談（ $p<0.05$ ）、モラル合計得点（ $p<0.001$ ）との間で有意差があった。また、「周囲に頼める人がいるから」と回答した人では、現在の仕事の有無（ $p<0.05$ ）、訪問看護・介護を利用しているか（ $p<0.05$ ）、自身の世話や介護（ $p<0.05$ ）、食料品や日用品の買い出し（ $p<0.05$ ）、介護保険の相談（ $p<0.05$ ）との間で有意差があった。回答数が少なかった「助っ人隊」を利用しなかった他の理由である「頼み方がわからないから」「頼みたくないから」「その他」については分析から除外した。

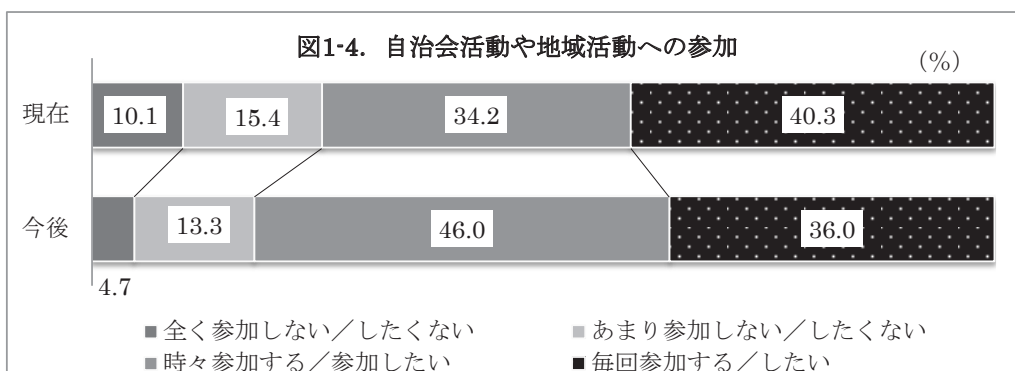
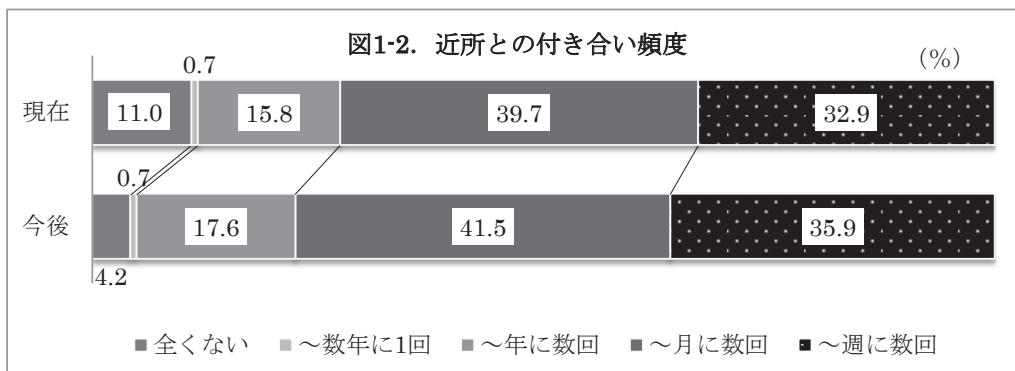
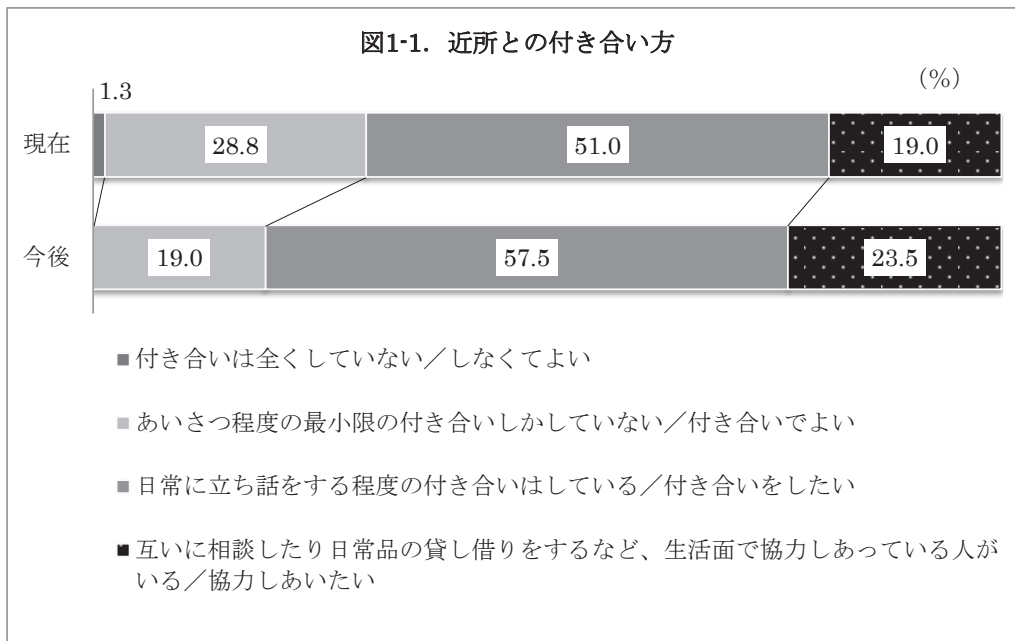
V. 考察

1. 「助っ人隊」の認知と人間関係との関連

現在、近隣住民との付き合いがある、自治会活動に参加していると答えた人ほど、「助っ人隊」の認知があった。高齢者の保健福祉サービスの認知について研究した小林ら¹³⁾は「自治会・町内会などの地域活動を主とする組織への参加は、サービス認知を優位に高めていた」と報告しており、本研究におけるT団地を対象とした調査でも共通した見解を得た。

また、同居家族がいる人の方で、いない人よりも「助っ人隊」の認知があった。内閣府¹⁴⁾の行った調査によると「近所との付き合いがないと答えた人が独居では11.2%、夫婦のみ4.4%、一般世帯6.8%であった。また、町内会・自治会・老人会などに所属していないと答えた人が一人暮らし世帯では39.5%、夫婦のみ世帯29.0%、一般世帯38.0%であった」と報告されている。このことから、独居の人は近所との付き合いが少ないため、情報を得にくい環境にあると考えられる。

小林ら¹⁵⁾によると、「孤立高齢者は私的・公的なサポートを得にくい」という結果がある。家族や近隣住民を含む、他者との交流が少ない人達は情報を入手または共有しにくいいため、必要なサポートを得られないのではないだろうか。そのため、家族関係が希薄である、独居である、近隣住民と付き合いがない、自治会活動に参加



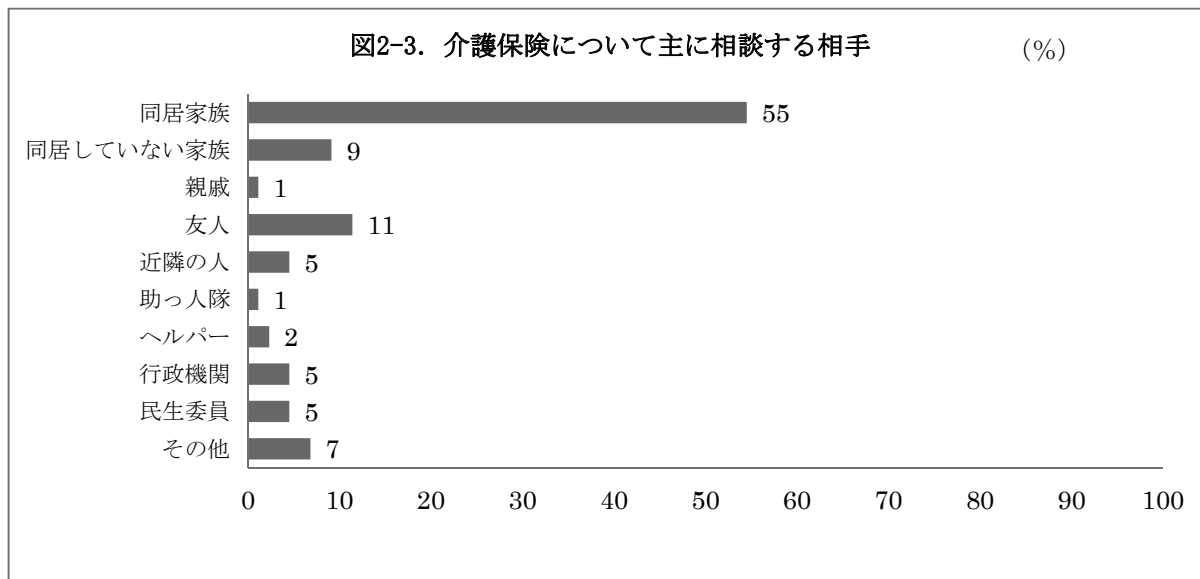
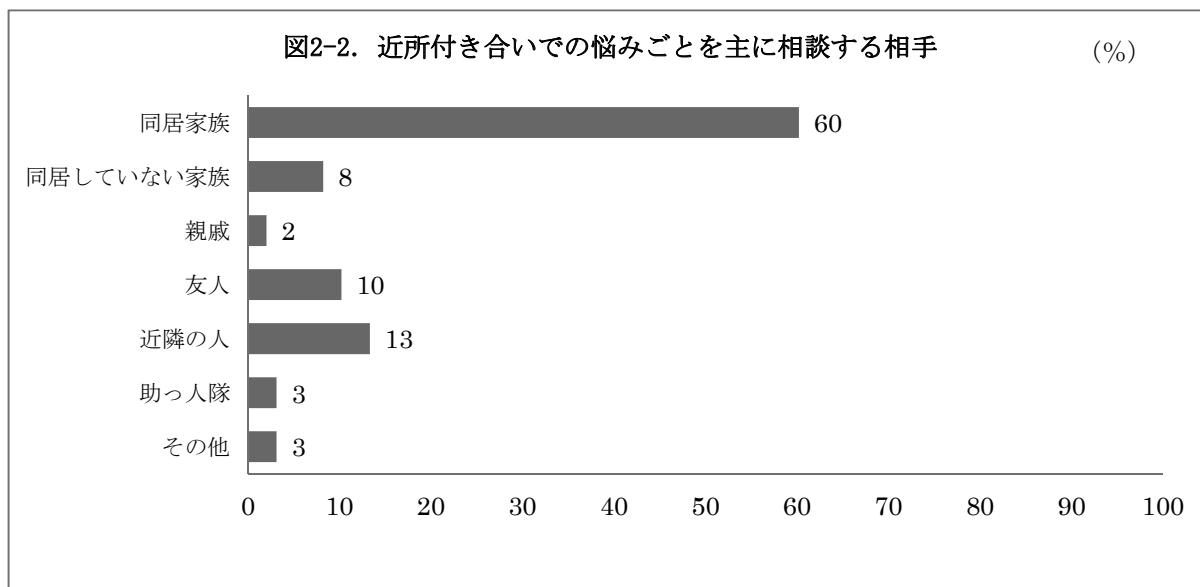
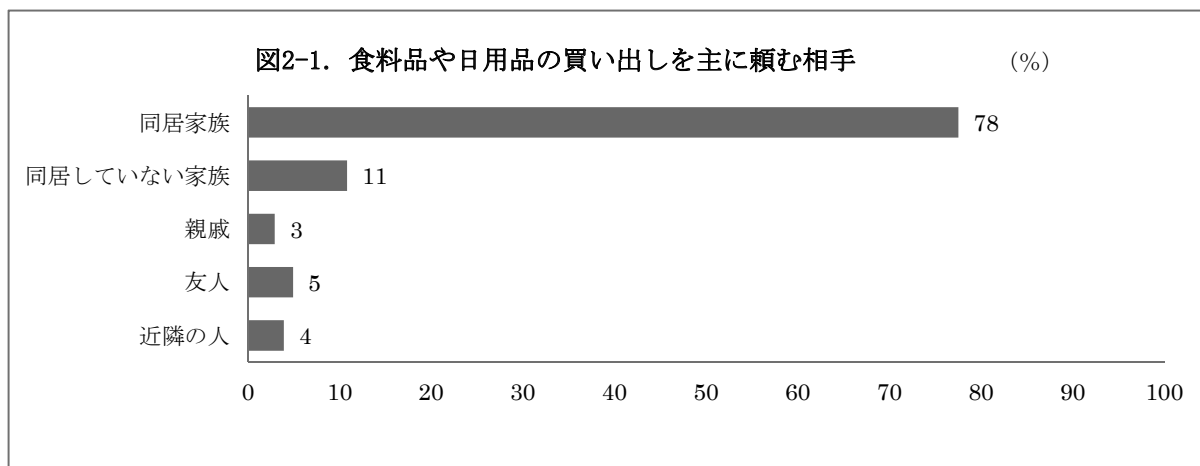


表3. 助っ人隊認知と現在の利用状況, 今後の利用とその属性との関係

属性	認知			利用			今後の利用		
	あり	なし	p 値	あり	なし	p 値	あり	なし	p 値
年齢 (mean)	68.0	66.6	n.s.	74.3	67.0	***	67.8	67.8	n.s.
性別 (% (n))									
男性	82.4 (70)	17.7 (15)	n.s.	5.9 (5)	94.1 (12)	**	61.0 (50)	39.0 (32)	n.s.
女性	92.5 (62)	7.5 (5)		17.7 (80)	82.4 (56)		68.2 (45)	31.8 (21)	
仕事の有無 (% (n))									
有	81.8 (36)	18.2 (8)	n.s.	0.0 (0)	100.0 (44)	***	66.0 (29)	34.1 (15)	n.s.
無	88.8 (95)	11.2 (12)		15.7 (17)	84.3 (91)		63.1 (65)	36.9 (38)	
家族形態 (% (n))									
独居	64.0 (16)	36.0 (9)	**	12.0 (3)	88.0 (22)	n.s.	76.0 (19)	24.0 (6)	n.s.
その他	91.1 (112)	8.9 (11)		10.5 (13)	89.5 (111)		60.7 (74)	38.3 (46)	
居住年数 (mean)	21.2	20.4	n.s.	20.8	21.1	n.s.	21.6	20.4	n.s.
訪問看護・介護の利用 (% (n))									
有	100.0 (5)	0.0 (0)	n.s.	40.0 (2)	60.0 (3)	n.s.	60.0 (3)	40.0 (2)	n.s.
無	85.5 (124)	14.5 (21)		8.9 (13)	91.1 (133)		63.1 (89)	36.9 (52)	
生活上の不安 (mean)									
健康状態	2.9	3.0	n.s.	2.6	2.9	n.s.	2.9	2.9	n.s.
自身の世話や介護	3.3	2.8	n.s.	2.9	3.3	n.s.	3.2	3.3	n.s.
家族の世話や介護	3.2	3.0	n.s.	2.9	3.2	n.s.	3.0	3.3	n.s.
家庭内の人間関係	4.1	3.8	n.s.	3.7	4.1	n.s.	4.1	4.0	n.s.
近隣との人間関係	4.1	3.9	n.s.	3.5	4.1	*	4.1	3.9	n.s.
近隣の住環境・生活環境	3.5	3.6	n.s.	3.3	3.5	n.s.	3.6	3.2	n.s.
地域の非行犯罪	3.7	3.6	n.s.	3.6	3.7	n.s.	3.8	3.6	n.s.
社会上の孤立	3.8	3.4	n.s.	3.3	3.8	n.s.	3.7	3.8	n.s.
経済状況	3.2	3.0	n.s.	3.1	3.2	n.s.	3.2	3.2	n.s.
安心総合得点	31.7	30.2	n.s.	28.5	31.8	n.s.	31.4	31.3	n.s.
ソーシャルキャピタル									
現在の近所との付き合い方 (mean)	2.9	2.6	n.s.	3.4	2.8	**	3.0	2.7	*
今後の近所との付き合い方 (mean)	3.1	2.8	*	3.5	3.0	**	3.2	2.8	**
現在の近所との付き合い頻度 (% (n))									
～週に数回/～月に数回	90.5 (95)	9.5 (10)	*	14.3 (15)	85.7 (90)	**	68.6 (70)	31.4 (32)	*
～年に数回/～数年に1回/全くない	77.5 (31)	22.5 (9)		0.0 (0)	100.0 (40)		48.7 (19)	51.3 (20)	
今後の近所との付き合い頻度 (% (n))									
～週に数回/～月に数回	92.6 (100)	7.4 (8)	**	12.8 (14)	87.2 (95)	n.s.	70.8 (75)	29.3 (31)	***
～年に数回/～数年に1回/全くない	68.8 (22)	31.3 (10)	**	3.1 (1)	96.9 (31)	**	37.5 (12)	62.5 (20)	***
近所への信頼度 (mean)	3.8	3.2	**	4.3	3.7	**	3.9	3.4	***
現在の自治会活動参加 (% (n))									
毎回/時々	91.7 (100)	8.3 (9)	**	10.0 (11)	90.0 (99)	n.s.	65.1 (69)	34.9 (37)	n.s.
あまり/全く	73.7 (28)	26.3 (10)		10.5 (4)	89.5 (34)		57.9 (22)	42.1 (16)	
今後の自治会活動参加 (% (n))									
毎回/時々	89.3 (108)	10.7 (13)	n.s.	9.8 (12)	90.2 (110)	n.s.	68.9 (82)	31.1 (37)	**
あまり/全く	77.8 (21)	22.2 (6)		11.1 (3)	88.9 (24)		38.5 (10)	61.5 (16)	
ソーシャルサポート (% (n))									
食料品や日用品の買い出しをする									
いる	92.1 (93)	7.9 (8)	**	10.8 (11)	89.2 (91)	n.s.	59.0 (59)	41.0 (41)	n.s.
いない	75.0 (33)	25.0 (11)		9.1 (4)	90.9 (40)		71.4 (30)	28.6 (12)	
近所づきあいでの悩みごとの相談をする									
いる	72.0 (90)	28.0 (7)	**	12.2 (12)	87.8 (86)	n.s.	62.5 (60)	37.5 (36)	n.s.
いない	38.9 (35)	61.1 (11)		6.5 (3)	93.5 (43)		65.9 (29)	34.1 (15)	
介護保険の相談をする									
いる	92.1 (81)	8.0 (7)	*	14.6 (13)	85.4 (76)	n.s.	62.1 (54)	38.0 (33)	n.s.
いない	78.3 (47)	21.7 (13)		6.7 (4)	93.3 (56)		66.7 (38)	33.3 (19)	
モラールスケール (mean)	11.4	10.6	n.s.	11.6	11.3	n.s.	11.3	11.3	n.s.

* p < 0.05, ** p < 0.01, *** p < 0.001

していない人達に加え、自治会に入会していない人達へも、「助っ人隊」の活動について伝えることで、「助っ人隊」の認知を上げていく事が出来ると考えられる。

2. 「助っ人隊」の利用と基本属性, 及び生活上の不安との関連

年齢, 性別, 職業の有無と「助っ人隊」の利用との間で有意な関連がみられ, 高齢, 女性, 無職の人々において「助っ人隊」の利用が多かった。年齢との関連に関し

ては, 加齢とともに身体能力が低下すると考えられ, 自分の身の回りのことを出来なくなることが多くなるからだと考えられる。性別との関連に関しては, 女性は身体能力が男性よりも低く, 高所での作業や重い物の移動が困難であることが考えられる。職業の有無との関連に関しては, 有職者であれば年齢が比較的若いこともあり, 身の回りの事は自分で出来る。平均年齢が約5歳上回る無職者においては身体能力がより低下していることもあり「助っ人隊」のニーズが高いことが考えられる。

表4. 助っ人隊を利用していない人の理由と属性との関係

属性	未利用：自分達でできるから			未利用2：周囲に頼める人がいるから		
	該当	非該当	p 値	該当	非該当	p 値
年齢 (mean)	66.8	67.7	n.s	69.4	66.6	n.s
性別 (% (n))						
男性	88.2 (67)	11.8 (9)	n.s	9.2 (7)	90.8 (69)	n.s
女性	85.7 (48)	14.3 (8)		12.50 (7)	87.5 (49)	
仕事の有無 (% (n))						
有	90.7 (39)	9.3 (4)	n.s	2.3 (1)	97.7 (42)	*
無	85.2 (75)	14.8 (13)		14.8 (13)	85.2 (75)	
家族形態 (% (n))						
独居	76.2 (16)	23.8 (5)	n.s	9.5 (2)	90.5 (19)	n.s
その他	88.9 (96)	11.1 (12)		10.2 (11)	89.8 (97)	
居住年数 (mean)	21.2	19.4	n.s	20.0	21.1	n.s
訪問看護・介護の利用 (% (n))						
有	33.3 (1)	66.7 (2)	*	66.7 (2)	33.3 (1)	*
無	88.4 (114)	11.6 (15)		9.3 (12)	90.7 (117)	
生活上の不安 (mean)						
健康状態	3.0	2.5	n.s	2.4	3.0	n.s
自身の世話や介護	3.4	2.6	*	2.5	3.4	*
家族の世話や介護	3.3	2.7	n.s	3.0	2.1	n.s
家庭内の人間関係	4.2	3.2	***	3.7	4.1	n.s
近隣との人間関係	4.2	3.1	***	3.7	4.1	n.s
近隣の住環境・生活環境	3.6	2.7	**	3.1	3.5	n.s
地域の非行犯罪	3.8	3.2	n.s	3.4	3.7	n.s
社会上の孤立	3.9	3.3	*	3.6	3.8	n.s
経済状況	3.3	2.6	*	3.4	3.2	n.s
安心総合得点	32.6	25.9	**	28.8	32.1	n.s
ソーシャルキャピタル (mean)						
現在の近所との付き合い方 (mean)	2.9	2.5	*	2.9	2.8	n.s
今後の近所との付き合い方 (mean)	3.0	2.7	n.s	3.0	3.0	n.s
現在の近所との付き合い頻度 (% (n))						
～週に数回/～月に数回	90.9 (80)	9.1 (8)	n.s	9.1 (8)	90.9 (80)	n.s
～年に数回/～数年に1回/全くない	80.0 (32)	20.0 (8)		12.5 (5)	87.5 (35)	
今後の近所との付き合い頻度 (% (n))						
～週に数回/～月に数回	90.4 (85)	9.6 (9)	n.s	9.6 (9)	90.4 (85)	n.s
～年に数回/～数年に1回/全くない	76.7 (23)	23.3 (7)		16.7 (5)	83.3 (25)	
近所への信頼度 (mean)	3.75	3.29	*	3.57	3.70	n.s
現在の自治会活動参加 (% (n))						
毎回/時々	88.8 (87)	11.2 (11)	n.s	10.2 (10)	89.8 (88)	n.s
あまり/全く	81.8 (27)	18.2 (6)		12.1 (4)	87.9 (29)	
今後の自治会活動参加 (% (n))						
毎回/時々	88.1 (96)	11.9 (13)	n.s	10.1 (11)	90.0 (98)	n.s
あまり/全く	82.6 (19)	17.4 (4)		13.0 (3)	87.0 (20)	
ソーシャルサポート (% (n))						
食料品や日用品の買い出しをする						
いる	90.0 (81)	10.0 (9)	n.s	13.3 (12)	86.7 (78)	*
いない	79.0 (30)	21.1 (8)		2.6 (1)	97.4 (37)	
近所づきあいでの悩みごとの相談をする						
いる	91.8 (78)	8.3 (7)	*	12.9 (11)	87.1 (74)	n.s
いない	76.2 (32)	23.9 (10)		4.8 (2)	95.2 (40)	
介護保険の相談をする						
いる	90.7 (68)	9.3 (7)	n.s	14.7 (11)	85.4 (64)	*
いない	81.1 (43)	18.9 (10)		3.8 (2)	96.2 (51)	
モラルスケール (mean)	1.8	7.9	***	10.1	11.4	n.s

* p < 0.05, ** p < 0.01, *** p < 0.001

生活上の不安の中で、近隣との人間関係と現在の「助っ人隊」の利用との間では有意差がみられ、近隣との人間関係の不安があるほど、「助っ人隊」を利用するという結果が出た。この結果については、近隣との人間関係に不安があれば、近所の人に頼れないため「助っ人隊」を利用し、近隣との人間関係に不安がなければ「助っ人隊」に頼まずに近所の人に頼ることができるからだと考えられる。

3. 「助っ人隊」の利用とソーシャル・キャピタルとの関連

現在および今後の付き合い方や付き合いの頻度と「助っ人隊」の利用との間では有意な関連がみられた。近所への信頼度は「助っ人隊」の利用、今後の利用との間で有意差が見られ、信頼度が高いほど「助っ人隊」を利用している人が多かった。このことより、ソーシャル・キャピタルが豊かな人達では、「助っ人隊」を利用したいと考えている人が多いと思われる。また、内閣府の調査¹⁶⁾によればソーシャル・キャピタルの培養とボランティア活動を始めとする市民活動の活性化には、互いに他を高めていくような関係、すなわち、「ポジティブ・フィードバック」な関係がある可能性が分析・抽出されている。このように、利用する住民と利用される「助っ人隊」との間に成り立つ信頼関係が、さらに「助っ人隊」の活動を充実させるものと考えられる。同様に、「助っ人隊」の活動が充実していくことで、住民と「助っ人隊」との間に成り立つ信頼関係がさらに強くなり得ると考える。よってこれらの相互関係により、ポジティブ・フィードバックが促進されソーシャル・キャピタルがさらに豊かになると推察される。

4. 「助っ人隊」の未利用の理由と、生活上の不安およびモラル合計得点

「助っ人隊」を利用していない人において「周囲に頼める人がいるから」と答えた人は、「自身の世話や介護」についての不安が大きかった。「自身の世話や介護」の不安が大きい人は「助っ人隊」に代わる支援を得ていると考えられる。このことは「周囲に頼める人がいるから」と答えた人が、そうでない人よりも訪問看護・介護を利用する割合が高く、また「介護保険の相談をする人がいる」と答えている人の割合が、そうでない人よりも高かったという結果からも裏付けられる。

今回の調査対象者は60～64歳が42.0%と全対象者の4割以上を占めており比較的若いため、身の回りのことは「自分達で出来るから」と回答していた。「自分達で出来るから」と回答した人の安心総合得点の平均値は31.4 (SD7.1) 点、モラル合計得点の平均値は11.8点で有意に高かった。この結果から、自分達で出来るから「助っ人隊」に頼まなかった人は、現時点では生活上の不安は比較的小さく、生活満足度が高いということがわ

かる。しかし、調査票の自由回答欄において「今は元気で家族もいるため、「助っ人隊」を利用する必要はないが、将来は（「助っ人隊」があると）心強いと思う（計10件）」というような意見がみられたように、将来年を重ねた際の生活上の不安を少なからず抱いていると示唆された。内閣府の調査¹⁷⁾においても、老後に明るい見通しを持っている人の割合は、1978年の35.2%に対し、2008年では11.8%というデータから、一般的にも老後に不安がある人が多いことが示されている。本研究の調査対象者の4割以上が60～64歳であることから、団塊の世代が75歳以上の後期高齢者となった時、手助けが必要な人が増えることが予測される。また内閣府¹⁶⁾は、自治会・町内会等の地縁組織の活性化について、本来地域におけるソーシャル・キャピタル形成のための「家族関係」に次ぐ基本的な単位であり、「顔の見える関係」を担保するには最適な単位でもあると述べており、家族関係と同様に、地域内での住民同士の関係も重要視していかなければならないことを示唆している。小野寺ら¹⁸⁾は「ソーシャル・キャピタルの高さが住民の共助の意識の高さに繋がる」と述べており、ソーシャル・キャピタルが豊かになれば「助っ人隊」という組織をきっかけに住民同士での助け合いの意識が高まると考えられる。「助っ人隊」に頼まずとも「自分達で出来るから」と回答した人は、現在は近所との付き合いがあり、信頼度も高いという結果がみられたが、助けて欲しい時に、助けて欲しいと言えるようなソーシャル・キャピタルを、比較的若く、まだ安心総合得点・生活満足度が高いうちに構築していくことが今後の課題ではないだろうか。

特に性別について言えば、先行研究において西村¹⁹⁾は女性であるということ、暮らし向きに困難感がないこと、持ち家であること、サポート・ネットワークが豊かであることは孤立感を低下させる要因となっていると報告している。これは、女性は近隣住民と顔を合わせる機会が多い半面、男性は仕事等で家を空けることが多く、近隣住民との関係を作る時間が少ないためだと考える。本研究の自由回答において「自分も仕事を辞めたら「助っ人隊」として地域の役に立ちたい（同意見8件、うち6件が男性）」という意見が男性に多くみられ、男性も地域のために活動することで、地域住民との交流の機会や場を広げていくきっかけ作りをしたいのではないかと示唆される。Kawachiら⁵⁾は、1つの目的のために存在した組織が他の目的のために使用されることもあり、このようにしてソーシャル・キャピタルの形が構成されると述べている。高齢者を支援するという目的のために発足した「助っ人隊」が利用者の問題を解決するだけでなく、「助っ人隊」に参加しようとする人達のネットワーク作りにもなるとも考えられ、このようにして近隣関係が活発化していくことが期待される。

5. 地域におけるインフォーマル・サービスの役割

これまでソーシャル・キャピタルの積極的な側面を述べてきたが、Portes²⁰⁾は、ソーシャル・キャピタルの問題点として「外部の人間を排除する傾向や、グループメンバーの行き過ぎた主張、個人の自由の制限、好ましくない方向へ引きずられる可能性を挙げている。調査票の自由回答欄に「この自治会は自分達（役員とその周りにいる人達）のことばかり考えて動いている（1件）」という意見があったように、住民間での結束力が強すぎることで強制力が働き、一部の者が排除されるという問題が生じているものと思われる。また、現在の「助っ人隊」の利用と近隣との人間関係の不安において、「助っ人隊」を利用している人でそうでない人よりも近隣の人間関係の不安が高いことが明らかになった。このことはソーシャル・キャピタルが豊かな人ほど「助っ人隊」を利用するという結果とは異なる傾向を示している。しかし、「助っ人隊」はT団地のソーシャル・キャピタルの中で排除されかけている人達に働きかけることで、比較的中立なインフォーマル・サービスの役割を果たす機能があると考えられる。このように、個人の自由を制限することなく、手助けを求めている住民に対し、偏りなく支援を提供するシステムを作る必要がある。

6. 調査の限界

本調査では、自治会長から紹介を受けた60歳以上の高齢者を対象としたため、自治会未加入者は調査の対象外となった。今後は、自治会参加の有無に関わらず、当該地域の全住民を対象とした調査を行うことで、さらに研究を深めていくことができると考える。

VI. 結論

本研究は、「助っ人隊」の認知・現在の利用・今後の利用の現状を明らかにし、これらに関連する社会的・経済的要因を明らかにすることを目的とした。分析から得られた知見を要約すると、以下の通りである。

1. 家族や近隣住民を含む、他者との交流が少ない人達は必要な情報を入手しにくい環境にある。
2. 「助っ人隊」を利用している人には高齢、女性、無職であるという特徴がみられた。
3. ソーシャル・キャピタルが豊かな人ほど、「助っ人隊」の認知・現在の利用・今後の利用に有意な関連性がみられた。
4. 「助っ人隊」を利用せず、身の周りのことは自分達で出来る人たちは、生活上の不安が低く、生活満足度が高かった。

「助っ人隊」はソーシャル・キャピタルが豊かな人ほ

ど認知・利用されている反面、人間関係に不安がある人にも利用されている。このことから、「助っ人隊」はT団地のソーシャル・キャピタルの中で排除されかけている人達に働きかけることで、比較的中立なインフォーマル・サービスの役割を果たす機能があると考えられる。

謝辞

本調査にご協力いただきましたT団地の自治会の役員の皆様、および地域住民の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 河野啓, 高橋幸市: 日本人の意識変化の35年の軌跡 (1) - 第8回「日本人の意識・2008」調査から -, NHK放送文化研究所世論調査部 (社会調査), 2009. http://www.nhk.or.jp/bunken/summary/research/report/2009_04/090401.pdf: 2012/11/22
- 2) 共生社会政策統括官 高齢社会対策: 平成23年版高齢社会白書, <http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2011/zenbun/html/sl-3-3-01.html>, 2012/11/28
- 3) Robert D.Putnam: 『哲学する民主主義 - 伝統と改革の市民的構造』河田潤一訳, NTT出版株式会社, 東京, 2001.
- 4) Coleman, J.S.: Foundations of Social Theory. Cambridge, MA: Havard University, 1990.
- 5) Kawachi, I & Berkman, L: Social Cohesion, Social Capital-and Health, Social Epidemiology, 174-190, Oxford, UK: Oxford University Press, 2000.
- 6) こころを育む総合フォーラム: 特定非営利活動法人オバパト隊 (熊本県) http://www.kokoro-forum.jp/zenkoku/zenkoku-undo_obapato.html: 2013/01/07
- 7) 美田ふれあい快援隊 <http://www.mita-jichikai.org/kaientai.html>: 2013/01/07
- 8) 読売新聞: 地域課題解決の活動支援 高齢者「助っ人」自治会などに, 2012.
- 9) 長崎新聞: 「絆」再生の活動支援 支え合う取り組みに助成, 2012.
- 10) 長崎市 自治振興課 地域ふれあい係: ち・い・き ふれあいだより, 自治会情報通信第29号, 2011.
- 11) 古谷野巨: QOLなどを測定するための測度 (2), 老年精神医学雑誌, 7(4): 431-441, 1996.
- 12) 内閣府経済社会総合研究所: コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書資料編2: 内閣府, 2005 <http://www.esri.go.jp/jp/archive/hou/hou020/hou15c-2.pdf>: 2012/07/21

- 13) 小林江里香, 杉澤秀博, 深谷太郎, 柴田博: 高齢者の保健福祉サービスの認知への社会的ネットワークの役割 - 手段的日常生活能力による差異の検討 -, 老年社会科学, 第22巻, 第3号, 2000
- 14) 内閣府共生社会政策: 平成17年度 世帯類型に応じた高齢者の生活実態等に関する意識調査結果: 2006
- 15) 小林江里香, 藤原佳典, 深谷太郎, 西真理子, 齊藤政茂, 新開省二: 孤立高齢者におけるソーシャルサポートの利用可能性と心理的健康-同居者の有無と性別による差異-: 日本公衆衛生誌, 58(6)
- 16) 内閣府国民生活局市民活動促進課: 平成14年度内閣府委託調査 ソーシャル・キャピタル: 豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて, 2003.
- 17) 内閣府国民生活局: 平成20年度国民生活選好度調査, 2009.
- 18) 小野寺良二, 濱野強, 石田祐, 渡邊敏文, 藤澤由和: ソーシャル・キャピタルが地域の防災活動に及ぼす影響についての実証的検証-山形県自治会での事例から-, 鶴岡工業高等専門学校研究紀要, 44: 45-50, 2009.
- 19) 西村昌記: 一人暮らし高齢者の生活課題-サポート・ネットワークの観点から-, 老年精神医学雑誌, 15: 184-191, 2004
- 20) Portes: Social Capital: Its Origins and Applications in Modern Sociology, Annual Review of Sociology, 24: 1-24, 1998.

A Study of Elderly Residents in the T Housing Complex and an Informal Service Provided by the Residents – An analysis of ‘*SUKETTO – TAI*’ –

Kasumi IMAYA¹, Aimi HIRAYAMA¹, Yumi MAEDA¹

Kunie MOTOMATSU¹, Yuko Ohara-HIRANO²

1 Department of Nursing, School of Health Sciences, Nagasaki University

2 Graduate School of Biomedical Sciences, Nagasaki University

Received 30 November 2012

Accepted 8 January 2013

Abstract

Purpose: The purpose of this study was to identify the present conditions relevant to the current and future use of ‘*SUKETTO-TAI*’, a voluntary informal service group in the T housing complex of Nagasaki City.

Methods: A six-page questionnaire was developed and distributed to 271 residents older than 60 years of age living in the T housing complex. The questionnaire categories included basic demographics, life anxieties, social capital, social support, and a morale scale. The responses were analyzed to determine the level of recognition of ‘*SUKETTO-TAI*’ and to evaluate the current and potential future use of ‘*SUKETTO-TAI*’.

Results: The finding of a statistical analysis suggested that respondents who lived with family members and reported having social support were likely to recognize ‘*SUKETTO-TAI*’. Those who were older, female, and who did not have any current jobs were likely to use ‘*SUKETTO-TAI*’. The data also suggested that respondents with high social capital, recognized, used and expected to use ‘*SUKETTO-TAI*’ in the future. However, the analysis of the morale scale scores did not find any correlations with the recognition, use or expected use of ‘*SUKETTO-TAI*’.

Discussion: ‘*SUKETTO-TAI*’ is used not only by people who are rich in social capital, but also by people who are anxious about human relationships in the community. It can be assumed that ‘*SUKETTO-TAI*’ plays a relatively neutral role in the T housing complex by providing informal services for people who are likely to be isolated.

Health Science Research 25(1): 29-40, 2013

Key words : Informal Service, Social Capital, Social Support, Elderly People, Community